リオ・グランデ

360円

昭和37年4月20日発行

著者　曽野　綾子

発行者　小野　詮造

発行所　文藝春秋新社

東京都中央区銀座西 8—4

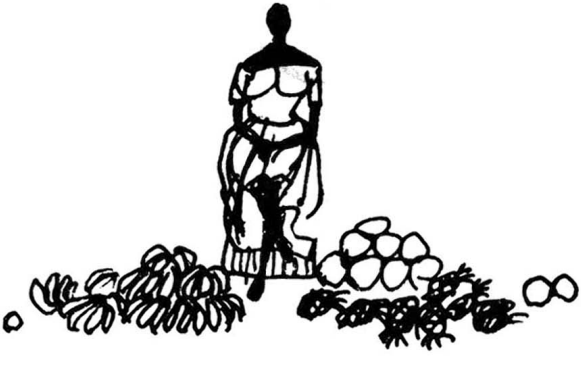
印刷　大日本印刷

製本　中島製本

Ayako Sono　Printed in Japan

リオ・グランデ

曾野綾子



目次

第一章　リオ・グランデ　7
第二章　黒い飛行機　33
第三章　怪鳥の卵　53
第四章　驟雨　81
第五章　貘と禿鷹　109
第六章　革命の火　134

第七章　ピルーの樹の下で　158
第八章　ラス・カサス沿線　174
第九章　ヌエボスたち　203
第十章　百種の緑　221
第十一章　日曜日　247
第十二章　白鷺　273
第十三章　百種の青　292

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀　長尾みのる

リオ・グランデ

第一章　リオ・グランデ

1

二見周造が空港に着いた時、サンタ・クルス市のターミナル・ビルの灯はまだあかあかと輝いていた。彼は駐車場を探し、運転台を下りる時、ちらりと自分の足許を見て、はいている黒靴がきれいに磨かれているのに満足を覚えた。足許のコンクリートの舗装の上には小さな水溜りがある。雨の水たまりではない、撒水車がまいて行った水にちがいなかった。水溜りはほの白く夜が明けかかっていることを示していた。しかし頭上にはまだ星があった。赤道に近い空にはりついたボタンのような星であった。しかし感激することはない。星は星である。

二見は念入りに空っぽの車に鍵をかけてから、だだっぴろい駐車場を横切った。明け方の空気は首筋にひややかである。空港の建物の中に一歩入ると、二見はむっとするような空気に人臭さを感じた。

パジャマを着ただけの五つ位の子供が歩きまわっていた。これは通過客のアメリカ人に違いなかった。

二見はすぐに、片隅のソファに手もちぶさたな恰好で坐っている二人の日本人を見つけ出した。総領事の命令で送りに来ている副領事の依田とL新聞の記者香椎の二人である。

「いやあ、えらくおくれましたな。お眠いでしょう。これほど遅れるとわかっていたら、ホテルをひきあげて、私の家のほうにでも来て休んで頂けばよかったですな」

二見の声に、香椎も、そして依田もしぶしぶ立ち上った。

「わざわざ、こんな早朝にお見送り頂きまして、これは恐縮です」

「いや、最近はとみに朝早く目がさめるようになりましてね。年が年ですからな。それでふと思いついて航空会社にきいてみると、果して一時間以上おくれてるというじゃありませんか。それなら丁度目が覚めたところだから、朝の散歩、と思ってお見送りに来たんですよ。コーヒーでもいかがです」

「今、食堂から帰って来たところなんです」

依田は穏かではあったが、二見に言い返すように言った。そんな気のきかないことはしていませんよ、という調子だったので、二見はやむなく香椎の隣のレザー張りの長椅子に腰を下ろした。

「とにかくこの国の飛行機会社はひどいですよ。ひとを待たせることは当り前だと思ってるんですから。第一、時間通りにいっても、ここを通るのは毎日、午前二時半なんですからね」

二見は、レザー張りの椅子の冷たさをどこか心の片隅で期待しながら手でさわってみたのに、それは冷たいどころではなく、何となくべとべとと生ぬるかった。そこに誰かが坐っていた、という訳ではなく、こちらがだまされているように、その椅子は一年中生温いのであった。

「依田さんにも、もうお帰り頂くようにさっきから言っているんです」
香椎は、新聞記者らしく事務的で、しかもよく気がつく性格のようにみえた。
「馴れてますから、私は一向に平気です」
依田は言った。
「それに今、涼しくて、一日中で一番いい時間ですからね」
二見は受けてから、
「第一、途中で帰ったりしたら、総領事が御機嫌悪いですよ。総領事は何といいますかなあ、私なんぞもシャッポをぬぎたくなるほどの完璧主義者でしてね」
依田は黙っていた。
「おかげで、大変よく便宜をはかって頂きました」
香椎は言った。依田が無表情にタバコをつけた時、売子のいない売店の傍のジューク・ボックスがやけっぱちのようにやかましく鳴り始めた。
「土着の音楽はあまりやらないんですね。アート・ブレーキーじゃないですか」
香椎が言った。
「ほほう、そうですか。そう言えばそうだな」
二見は言ったが、彼は決してアート・ブレーキーに詳しい訳ではなかった。
「日本人が民謡なんかあまりきかないのと同じですね」
香椎は言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「機械がアメリカからの輸入ものですからね」
二見は依田の言うことに同調して頷いたが、心の中では全く依田の愚かさにうんざりせずにはいられないような気持だった。この気の小さい現地やといで役人になった男は、いつも当り前のことしか言わないのであった。
「しかし、もう一週間？　十日ですか。十日で日本ですな。羨しいです」
二見はもう一度、搭乗口からみえる空を見た。空はさっきと比べるとますます淡く、クリーム色がかっていた。
「羽田から銀座裏に直行して飲み明かしましてね、翌朝、ちゃんと社に出ていたという猛者もいますが、僕らはいけません」
「いいですなあ、日本の……」
と二見は言いかけたが、日本の何がいいのかよくわからなかった。
「二見さんも、そろそろ帰られるでしょう」
香椎が言った。
「その気配はないですか」
「本省へ行ってそんなことをおっしゃってごらんなさい、『二見？　ああ、あいつはフィデリダでまだ生きてますかね』ってのが関の山でしょうな」
二見は声をあげて笑った。この卑屈な笑いには、大ていの相手がどぎまぎするので二見は面白く思うのであった。

「言葉の関係もありますね。英語だといくらも代りの人があるんです。しかしスペイン語となるとね」

依田が言った。

「そうそう。その意味で、私は仕事に満足しとりますよ。何しろ移民の方たちのための仕事ですからね」

二見は依田の意見に賛成してみせながら言った。この現地やといの男は、南米のウルグァイ生まれである。高専ぐらいを日本ででたらしいけれど、生まれた国の言葉が喋れるのは当り前のことであった。それなのに、彼は何かしら特別に高級な技能かなんぞのようにそれを吹聴するのであった。

その時、アナウンスがあった。

「とびますね」

スペイン語など大してわからない筈の香椎が真先に言った。

「よかったです」

依田もいそいそと立ち上った。この男は、もう体全体が眠そうだった。

「もうこれで、いよいよ、こういう文化果つる国とも縁が切れますな」

二見は愛想よく言った。

「そんなことはありません。実に楽しかったです」

「それはそうですね。日本へ帰って、自分のうちに落ちついてみると、旅行中ひどい目にあった所のほうが妙に懐しいそうですからな。もっとも、それは、ここで生水をのみましてね、アメーバ赤痢に

かかって入院なんぞして、一月ばかりひどい目に会って帰った男の話ですが」
「ま、それはそうでしょうね。強烈な印象という点ではそれに違いないですから」
三人は柵のところまで来た。
「ではお元気で」
二見はまず香椎と握手した。そしてこのまぎれもない日本人の悪気のない手を感じた時、二見は少しばかり感傷的になった。二見の頭の上には、この国の大統領のホセ・マリア・カルドソの軍服姿の写真があって、にこりともせずにこちらをみているようだった。
香椎が飛行機のほうに向って歩き出す時、その姿は、もう黒白写真ではなく、ちゃんとした色彩写真とみえるほどに、夜はあけかかっていた。
依田と二見は、お互いにむっつり黙りこくったまま、戸外の柵の前で、目にみえぬ相手に最後の形式だけの尊敬を払うために立っていた。空気には早くも日中のだらけた暑さの匂いのようなものがまざり始めていた。それは野卑な暑さであり、飛行機に乗って行く人間は何か非常に利口でましな事をしていて、とり残された連中はどれもこれも阿呆面をしているように、普段の二見なら思うところだった。
しかし、今日、彼は一種独特の爽やかさと自虐的な解放感を二つながら味わっていた。
飛行機がプロペラをまわし始めた時（一九六×年の夏現在、民間航空のジェット機はまだこの路線にまわされていない）彼は依田に機嫌よく言った。
「これでまあ、無事に終りましたな」

依田は「そうですね」と答えたが、明らかに二見の言葉を不愉快に思っている様子だった。彼は只、それに対して、二見が年上であり、その上、役所の俸給を比べてみても明らかに二見のほうが上であるというだけの理由で、辛うじて黙っているにすぎない、という印象を見せつけていた。何故なら五日間、香椎の世話をしたのは主に自分であり、一度ばかり夕飯によび、半日そこらへんをちょっと案内しただけの二見が、「無事に終りましたな」などという感慨を抱くのは僭越だ、という表情が見えすいていた。

二見にはそれが又愉快でたまらなかった。この男は、間もなく日本から送られて来たL新聞で、あの新聞記者の書いた記事の中に、フィデリダの日本移民は必ずしも成功していないという内容を読み、さぞかし憤慨することだろう。《あんなにつきっきりで世話してやったのに、あの恩知らず奴が！》と依田は考えるに違いないのである。二見はそれを思うと、背中がうずうずした。どんなに懐柔しようとしても、このフィデリダ共和国内の日本移民の状態を、完全に満足すべきものと書いてくれる新聞記者がある訳はない。

只、新聞記者や作家などという口ばかり達者な連中の来訪が、あまり好ましくないという点では、フィデリダ共和国、サンタ・クルス市の日本総領事館副領事依田一昭（かずあき）も、開発省移民局移民調整官・二見周造も恐らく同じであるに違いなかった。二見はそれを相手に言いたかったが、それはどう考えても依田の意をことさらに迎えるような結果になるのでやめてしまった。

「五日や六日、そのへんをちょろちょろ歩いただけで、何が書けるんですかね」

依田は二見に言った。この男も又、今日本に帰って行く新聞記者に対して漠然とした不安を感じて

いるらしいと思うと、二見は急に同志的な親しさのようなものまで感じそうになった。しかし彼はポケットからハンカチをとり出して、早くもじっとりと浮き始めた額の汗をふきながら言った。
「何しろ、書くことが商売の人ですからね。何かは書くでしょう」
飛行機の爆音にまけないように、二見は大声で答えた。
「しかし真実を書いてほしいですからね、こちらとしては」
「それはそうですとも」
二見はおかしさをこらえて賛成の意を表した。依田は本当に、新聞記者に真実を知られたいと思っているのだろうか。それに、真実とは又、何という、大それた言葉だろう。真実とは、神さんか仏さんだけがご存じのことだ。同じ土地に百年生きていたとしても、その男がその土地の真実を知っているとは限らない。二見は今、依田が自分だけは真実を知っていると信じこんでいるらしいことがおかしくてたまらなかった。別の日本人に尋ねたら、彼は又、依田とはちがったフィデリダの真実を自分こそ話すことができるというだろう。
何もかもが本当は幻影であり、同時にその当人にとってだけ真実なのだ、といおうとして二見は思いとどまった。二見は、今、日本式の物の考え方でこの土地の現実をわり切ろうとする一人の旅行者を内地へ追っぱらったところなのであった。そして彼は爽快な気分であった。しかし二見は香椎に、ここで自分の仕事の都合のいいことを見てもらおうとか、見せてやろう、とか言う気はおきなかった。逆に、二見は総領事館がかくしておきたがっている現状をすっぱぬいた。いずれ、何かフィデリダ移民と日本の出先官僚に関するろくでもない記事が新聞に出ることになるだろう。矢は既に放たれたの

だ。しかしとにかく香椎という、異質の存在がなくなって、このフィデリダの空気が本来の怠惰なものに帰るのが彼は何より嬉しかったのだ。

十分後に二見は、自分と依田に対する共通の労りをこめて依田の肩を抱きながら、ターミナル・ビルを出た。

「勿論、車は待たせておありでしょう」

二見は言った。

「総領事の車で来ましたから」

車は鼻先に、日の丸をたてるようになっている総領事のクライスラーであった。勿論、当人が乗っていないので、今、その国旗は巻かれて上に黒い覆いがかぶせられていたが、それだけで車には或る種の威厳がそなわっていた。

二見は依田がクライスラーにのりこむのをわざといんぎんに見送ってから、自分の乗って来た小型のドイツ車のところへ戻った。

水溜りは早くも乾いていて、星はもうそのあとかたすらなかった。

2

二見は目下のところ、中央広場に近い最新式の十四階だてのアパートの、十階のフラットに息子と、日系人の女中と暮らしていた。寝室は、使用人室をのぞいて三つあり、他に居間と食堂があった。ア

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com